第 29 回中国人強制連行受難者追悼会あいさつ

第 29 回中国人強制連行受難者追悼会にご参加の皆様。

私は、日中労働者交流協会（日中労交）の事務局長の藤村です。本日は日中労交からは、平石さんも来ています。皆様が、歴史を忘れず継承するこの追悼会を 29 回も続けてこられたことに敬意を表します。

さて、私たちの会は、一昨年結成 50 年を迎え、「南京に『日中不再戦の誓い』の碑をたてて～日中労働者交流協会 50 年のあゆみ～」の小冊子を出版しました。日中労交が、この南京に建立した碑文には「中国侵略戦争を労働者人民が阻止しえなかったことを深く反省し」とあります。今高市政権が進めている中国敵視政策と日本各地での軍事力強化、そして今現在行われている「キーンソード 27」という米軍や自衛隊などによって行われている軍事演習を前にして、この言葉を胸に刻み各職場や地域での活動に会員各自が主体的に参加しています。

皆様が作られたこの彰往察来碑は、「往（おう）を彰（あきら）かにして来（らい）を察す」とも読みます。まさに歴史に学び正しく未来を歩んでいこうとの決意を、中国人殉難者と幸存者とそのご家族、広くは中国人民に誓った言葉だと思います。ここには相通じるものがあると思います。

ところで私自身は、日本とりわけ東京から満蒙開拓団として渡った人たちの事をこの間調査してきました。東京から 1 万人もの人たちがなぜ開拓団に参加したのかということです。当時の日本政府は開拓団員作るために日本各地に訓練所を作りました。私が働いていた大田区多摩川にもありました。ここでは農業訓練の他に、侵略の意図を隠し「王道楽土」を作ると言う思想教育が行われていました。実際は「王道楽土」ではなく中国人を追い出し日本人の村を作ったのです。そして、敗戦になると日本政府は、開拓民たちを棄民にしました。私はこの満蒙開拓団の歴史を学ぶ中で、歴史に学ぶことと同時に、再び繰り返さない事の大切さを学びました。

今、彰往察来の碑を前にしてこの思いを強くしています。

皆様、中国との真の友好とアジアや世界の平和に向けて共に頑張りあいましょう。

2026 年 10 月 24 日

日中労働者交流協会　事務局長　藤村　妙子